

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 55 回 第 11.3.1.3.1 節

2020 年 4 月 1 日

小 田 勝

「11.3.1.3.1 助詞「の」「が」による追加型モノ準体句」の 340 頁続きから。ここでは、本書掲示の句型の類例を、次々にあげていこう。用例(10)(11)のような形式は、次のような句型でも現れる。

- ・陪従（＝樂人）も、石清水、賀茂の臨時の祭りなどに召す人々の、道々の殊にすぐれたる限りをととのへさせ給へり。（源・若菜下）

用例(12)～(14)の類例、

- ・唐めきたる白き小桂<sup>うちき</sup>に、濃き[衣]△がつややかなる△重ねて（源・玉鬘）

用例(15)～(18)の類例、

- ・先帝の四の宮の、御容貌<sup>かたち</sup>すぐれ給へる聞こえ高くおはします△、母后世になくかしづき聞こえ給ふ△を、上に候ふ典侍は…ほの見奉りて（源・桐壺）
- ・兄弟<sup>せうと</sup>の、童殿上する△、常にこの君（＝夕霧）に参り仕うまつる△を、例よりもなつかしう語らひ給ひて（源・少女）

341 頁用例(19)～(22)の類例。

- ・一七八歳ばかりの童の、長短<sup>たけひき</sup>にて、身太くて、力強げなる△が、赤髪なる△、いどこよりともなく出で来て（今昔 12-34）
- ・竜泉寺とて、大きなる寺の、古<sup>ふる</sup>りたる△が、人もなき△ありけり。（宇治 1-17）
- ・空に物の鳴りければ、出でて見るに、金の色したる僧の、光を放ちたる△が、大きき丈六なる△、空より飛び来たりて（宇治 15-10）
- ・いにしへ、いみじうかたらひ、夜昼歌など詠みかはしし人の、ありありても、いと昔のやうにこそあらね、たえずいひわたる△が、越前守の嫁にて下りし△が、かきたえ音もせぬに（更級）
- ・年七十余りばかりなる翁の、髪も禿げて、白きとてもおろおろある頭に、袋の烏帽子をひき入れて、もとも小さき△が、いとど腰かがまりたる△が、杖にすがりて歩む。（宇治 11-12）
- ・唐人<sup>からひと</sup>の、目つくるふ（＝治療スル）△があなる△に見せんと思して（大鏡）〈準体句末

尾ノ「なる」ハ伝聞ノ助動詞>

同格の後項に「にて」が現れる形のものもある。

- ・庵の内より、若き女の、年二十余りばかりにて、いと清げなる△、出で来たり。(今昔 31-15)

用例 (23) ～(26)の類例、

- ・年三十ばかりの男の、鬚黒き△が、綾藺笠きたる△が、節黒なる胡籙、革巻きたる弓持ちて紺の襖着たる△が、夏毛の行藤、白足袋はきて、葦毛の馬に乗りてなん来べき。(古本説話集 69)

また、次のような句型もある。

- ・年四十余りばかりなる男の、かづら鬚なる△が、無文の袴に紺の洗ひざらしの襖着、山吹の絹かざみよくさらされたる着たる△が、猪のさかつらの(=毛並ミヲ逆立テタ)尻鞆しりざやしたる太刀はきて、猿の皮の足袋たびに、沓きりはきなして(=シッカリト履イテ)、脇を搔き、指およびをさして、と向きかう向き、物言ふ男立てり。(宇治 11-8)

341～342 頁用例 (28) ～(32)の類例、

- ・あらたまの年の暮れ待つ大空は曇るばかりの慰めもなし (続古今 1122)

これに関連して、次のような句型もみられる。

- ・「[扇ヲ] 一つ賜へ」と[女ニ] 言ひやり給へりける。よしある女なりければ、良くておこせてむと思ひ給ひけるに、色などもいと清らなる扇の、香などもいとかうばしくておこせたる。(大和 91)

用例(34)(35)については、節を新設したい。用例(34)の類例をあげる。

- ・勅として祈るしるしの(= DEAL) 神風に寄せ来る浪はかつくだけつつ (増鏡)

なお、上代には、「北山にたなびく雲の青雲」(万 161)、「妹が家に咲きたる花の梅の花」(万 399)、「鶏かけの垂り尾の乱れ尾の」(万 1413)、「春さればまづ鳴く鳥の鶯」(万 1935)、「我が里に今咲く花のをみなへし」(万 2279)、「水鳥の鴨」(万 2720)のような、重複性の強い同格表現がみられる(野村剛史 1993)。用例(35)の類例をあげる。

- ・また、若やかなる五位ども、顔もしらぬどもも多かり。(源・東屋)
- ・この内記が知る人の親φ、大蔵大輔なる者に (源・浮舟)

この頁(342頁)の2番目の◆の類例をあげる。

- ・年のはに梅は咲けどもうつせみの世の人我し春なかりけり (万 1857)

今回の補遺稿は、ほとんど類例の揭示であった。